



わが家のキャンプ

私たち家族にとって毎年欠かせない行事の一つがキャンプである。初めて家族でキャンプをしたのは長女が4歳、次女が1歳の時だった。夜はあいにくの風雨で、子どもたちがぬれはしないかと心配した夫が、一晚中テントの雨よけ対策をしていたのを覚えている。翌朝には雨も上がり、親子で山の自然を心ゆくまで楽しんだ。

あれから11年、キャンプの習慣は続いている。季節は5月。春が近づいてくると、今年はどこへ行くかとおぼろしくしてくる。

キャンプの一番の魅力は、時間を気にせず自然を感じながら過ごせることである。外で食べるご飯は格別におい



町生 三枝 倉橋さん

い。今では子どもたちも大きくなり、野外での調理やテントの設営、撤収の手際も良くなってきた。食事の支度や後片付けなどは陽のあるうちに済ませなければならぬ。5月の夜は冷え込むので、たき火で暖をとる。キャンプには日常にはない不便さがあるが、それも魅力の一つだ。最近では、末っ子の息子もペグ（テントを固定するためのくい）を打つのを楽しんでる。子どもの成長は頼もしい限りである。

私も子どもの頃、よく父に山や川、海に連れて行ってもらった。紅葉狩りや魚釣り、キャンプや海水浴などの思い出は、今も私の中で生きている。自然を楽しむことを教えてくれた父に感謝している。

あと何年家族でキャンプに行けるかなと思いつつ、次はどこへ行くかとお胸を弾ませている。

次は、吉井町の中川あゆみさんをお願いします。

市民文芸

短歌

阿南市春季短歌大会選

佳作 原 美智子
今朝の土手行けども四方は春がすみ迷い込み

佳作 清水 利子
たり墨絵の世界に

佳作 京寛 幸美
薄紅のひらひらスカートひるがえし素足の少女と芽吹きし桜

佳作 枝川 照子
ゆうらりと春の妖精舞っている紫なばなのあふるる庭に

佳作 佐野 幸子
つまづきつ転びながらの来し方を語れば領く友のまなざし

佳作 清 善恵
初恋の人の住んでた十三の地名見つける貰った菓子に

佳作 賀上 花子
ほのかなる香にさそわれてふととどむ白梅一輪春の足音

佳作 田上 鶴子
畑の草抜く手元には天道虫いま目覚めしか黒紋光る

俳句

阿南市俳句連合会選

長き夜や幼なの所作の笑い種

鎌矢美代女

西岡 侃
病みながら八十路を歩む秋の風

阿部ますみ
銀漢や波音を消す風の音

藤本 治平
秋刀魚焼く煙は何処IH

紅露 正行
流木に二百十日の波の音

富永 恵女
地に届き刀のような秋茄子

大平 夏子
流れ来る行進曲や天高し

田中 栄子
露けしや捨て猫居着く松林

市瀬 和子
色づきし山道深し秋遍路

小谷 史井
鈴虫や夜毎に育つ小田の月

川柳

阿南川柳会 高木旬笑選

滝川 太郎
そう来たかここは一先ず力抜く

田上 鶴子
思うまま誰も文句は言うて来ぬ

武田 敏子
ほどほどに生きて手柄のない後期

鈴木レイ子
ロボットが介護する日がきつと来る

岩佐まさよ
桃源郷橋を渡ればあるかしら